

すきやねん

第39号

令和4年3月10日
発行 周枳公民館
住所 〒629-2503
京丹後市大宮町周枳
周枳区(自治会)内
☎(0772)64-4417(自治会)

周枳区人口

811戸

男:902人 女:983人
計:1,885人

(R3.4.1現在)

第一小学校 男子:44人 女子:58人
計:102人

大宮中学校 男子:33人 女子:26人
計:59人

公民館落語会

笑いの渦に包まれる

12月12日の日曜日に公民館落語会を開催しました。参加者は三十数名とやや少人数でしたが、公民館の二階大広間は笑いの渦に包まれました。



女流落語家 桂三扇さん



古典の『時うどん』で大爆笑!

女流落語家の桂三扇さんと、文化庁などの受賞歴多数の落語家桂歌之助さんにお越しいただきました。桂三扇さんには、落語家として男女の違いによる苦勞を面白おかしく話していただくとともに、創作落語を一席していただきました。桂歌之助さんには、有名な古典落語「時うどん」を身振り手振りを交えながら、とても面白く演じていただきました。

お二人ともさすが落語家と改めて感心させられる語り口で、やはり生で聞く落語は楽しい、と改めて実感しました。



「やっぱり生の落語は面白い！」

また、来場いただいた皆さんにはアンケートにもご協力いただきました。アンケート結果をみると、おおむね好評だったと思います。「次回は友達を誘ってくる」とか「面白かった、涙が出るほど腹から笑った」などの感想をいただきました。また、公民館活動に対しても「コロナで大変ですが、落語以外にもいろいろ催しを期待しています」「コロナに負けず行事を行って欲しいです」などのご意見をいただきました。今後とも皆さんのご期待にそえるよう頑張っていきます。



大宮売神社参道府道側入口



大鳥居の沓石(土台石)

ちよと寄り道

周枳郷土史の

現場を訪ねて

「流された大鳥居」

大宮売神社参道松繩手にある六個の丸く平たい石。周枳郷土史には「1443年8月の大洪水で弥栄の堤村まで流された大鳥居の沓石(土台石)」とあります。

果たして大宮売神社の鳥居は弥栄の何処に流れ着いたのか。弥栄にも流された鳥居の言い伝えがあるのか。流された鳥居の行方を探し、弥栄町堤を訪ねました。



言い伝えを話す田家幸明さん



鳥居が流れ着いたという田んぼ

「うちの田んぼには流された鳥居が埋まっていて、掘ったら鳥居が出てくる」という父親からの言い伝えを話してくださいました。堤に住む田家幸明さん。流れ着いたと言われる田家さんの田んぼにも案内してもらいました。「田んぼがある場所の小字は『一ノ宮』なので、何か神社との関わりが感じられる」とおっしゃる田家さん。

堤区長さんに聞くと、流された鳥居の事は堤でも良く知られた言い伝えのようです。

市の文化財保護課によると、両方の地区に同じ言い伝えがあるのは興味深い、その時代の資料は非常に少なく、詳しい事を調べるのは難しい、ということでした。

周枳郷土史には「これを契機に毎年祭礼には堤村の代表者が参拝し、神饌を供えた」とありますが、今はそのような繋がりはないそうです。

すきびん すきな事♡

周枳に住む「〇〇が好き」な人に
会って「すき」の魅力を聞きます



自宅でも美味しく焼けます

今回ご紹介するのは、自宅にいるんな手作りパンを焼くのが好きな佐野由紀子さん。

小さな頃からお菓子作りが好きだったことと、父親の仕事の関係先からいただいた神戸の手作りパンの美味しさに出会ったことが、パン作りを始めるきっかけだったそうです。

手作りパンの魅力は何ですか？と聞くと「焼きたてのパンは香りが違うし、何よりすごく美味しいのが一番の魅力です。奥が深く、毎日出来上がりが違う面白さもありますね」



パン作りは魅力一杯
佐野由紀子さん

「公民館で親子パン作り講座みたいなものができて、将来パティシエ（菓子職人）になろう、という子どもがで

きたらうれしい」などなど、パンの話は尽きません。

ご自身は網野町出身で夫の博志さんは舞鶴出身。お二人にとつて特縁のなかった周枳に住むことにしたのは「賑やかな所だったから」で、「周枳は賑やかだし、自然もあるし、お祭りなどで人との繋がりもできたと、豊かでもとも住みよいです」とのこと。

「お祭りで神楽が家に来てくれた時は、『よく周枳に来てくれた』と受け入れられた感じがして、とても嬉しかった」そうです。

最近ではコロナ禍で自宅で過ごすことが増えました。佐野さんによると、パンを焼くのは想像しているより簡単ならしいので、パン作りで自宅時間を豊かにしてみるの良いかも知れませんね。



大勢で作るのも楽しいですよ

館長コラム 四季折々

清少納言は、枕草子の中で「冬はつとめて（早朝（がよい）」と言っているが冗談ではない。確かに歳を取るると早起きになるが、夜明け前から除雪車のガタガタという音が聞こえる日はたまったものではない。しかし、いつまでも布団の中に入っていたい気持ち振り切り、部屋のストーブをつけ、薄暗い中、妻と娘が車で出勤できるよう雪すかしをする。そうすると普段はあまり会話のない二人から「ありがとう」の声聞こえる。私がか家庭の中で居場所を感じる数少ない場面の一つである。

私の中で中途半端（熱し易く冷め易い）な趣味の一つに山登りがある。山と言えば小学校の遠足で登ったぐらいであったが、50代も後半に差し掛かり何かと健康が気になり始めた時、何気なく見たテレビで登山番組をやっていた。



磯砂山の山頂からの眺望

そこで、健康づくりを兼ねて山登りをしようと思っただけが始まりである。始めは大江山や磯砂

山など近くの低山を登るだけでハアと息が上がり、ただ登るだけで精一杯であった。慣れるにつれ、早春の若葉、青々と葉が茂る夏、紅葉の秋、また、麓と山頂など、それぞれの季節や標高によつて表情を変える山の姿を楽しむことが出来るようになり、段々と氷ノ山や大山、荒島岳など遠くの名のある山にも登るようになった。そして、この冬は雪山に挑戦と意気込んだが、それはあまりにも無謀なことであり除雪された縦貫林道を碓高原まで歩き、雪山を疑似体験した。

澄んだ空気を裂く鳥の羽音や小動物の足跡など、そこには、静寂の中にも生き物の生命を感じさせる姿があった。

話の最後が雪山だけにこのコラムがスベツてしまわないか、それだけが心配である。



雪に覆われた碓高原牧場



初夏の大山